

7.1 [水]	第550回 定期演奏会 サントリーホール／19時開演 The 550th Subscription Concert Wednesday, 1st July, 19:00 / Suntory Hall
---------	--

指揮／フランソワ＝グザヴィエ・ロト Conductor FRANÇOIS-XAVIER ROTH P.6

ヴァイオリン／郷古 廉 Violin SUNAO GOKO P.9

コンサートマスター／長原幸太 Concertmaster KOTA NAGAHARA

ブーレーズ 〈ノタシオン〉から第1、7、4、3、2番 [約17分] P.12
BOULEZ / I, VII, IV, III, II from Notations

ベルク ヴァイオリン協奏曲〈ある天使の思い出に〉 [約22分] P.13
BERG / Violin Concerto "To the memory of an angel"
I. Andante – Allegretto
II. Allegro – Adagio

[休憩 Intermission]

ハイドン 十字架上のキリストの
最後の7つの言葉 (管弦楽版) [約67分] P.14
HAYDN / Die sieben letzten Worte (orchestra version)

- I. 序奏 Maestoso ed Adagio
- II. 第1のソナタ「父よ、彼らをおゆるしてください。
彼らは何をしているのか、わからずにいるのです」Largo
- III. 第2のソナタ「あなたはきょう、わたしと一緒にパラダイスにいるであ
ろう」Grave e cantabile
- IV. 第3のソナタ「婦人よ、ごらんなさい。これはあなたの子です」Grave
- V. 第4のソナタ「わが神、わが神、どうしてわたしをお見捨てになったの
ですか」Largo
- VI. 第5のソナタ「わたしは、かわく」Adagio
- VII. 第6のソナタ「すべてが終った」Lento
- VIII. 第7のソナタ「父よ、わたしの霊をみ手にゆだねます」Largo
- IX. 地震 Presto e con tutta la forza

[主催] 読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団
[助成] 参文化庁文化芸術振興費補助金（トップレベルの舞台芸術創造事業）
[協力] アフラック（アメリカンファミリー生命保険会社）

7.24 [金]	第2回 東京オペラシティ名曲シリーズ 東京オペラシティ コンサートホール／19時開演 The 2nd Tokyo Opera City Popular Series Friday, 24th July, 19:00 / Tokyo Opera City Concert Hall
25 [土]	第81回 みなとみらいホリデー名曲シリーズ 横浜みなとみらいホール／14時開演 The 81st Yokohama Minato Mirai Holiday Popular Series Saturday, 25th July, 14:00 / Yokohama Minato Mirai Hall

指揮／デニス・ラッセル・デイヴィス Conductor DENNIS RUSSELL DAVIES P.7

ヴァイオリン／ダニエル・ゲーデ (読響コンサートマスター)
Violin DANIEL GAEDE (YNSO Concertmaster) P.9

チェロ／グスタフ・リヴィニウス Cello GUSTAV RIVINIUS P.10

児童合唱／東京少年少女合唱隊 Children's Chorus LITTLE SINGERS OF TOKYO P.10

合唱指揮／長谷川久恵 Chorusmaster HISAE HASEGAWA

コンサートマスター／長原幸太 Concertmaster KOTA NAGAHARA

ブラームス ヴァイオリンとチェロのための
二重協奏曲 イ短調 作品102 [約32分] P.16
BRAHMS / Double Concerto for Violin and Cello in A minor, op. 102

- I. Allegro
- II. Andante
- III. Vivace non troppo

[休憩 Intermission]

ホルスト 組曲〈惑星〉作品32 [約51分] P.17
HOLST / The Planets, op. 32

- I. 火星：戦争の神
- II. 金星：平和の神
- III. 水星：翼のある使いの神
- IV. 木星：快楽の神
- V. 土星：老年の神
- VI. 天王星：魔術の神
- VII. 海王星：神秘の神

[主催] 読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団
[助成] 参文化庁文化芸術振興費補助金（トップレベルの舞台芸術創造事業）（7/25）
[協力] 横浜みなとみらいホール（7/25）

7.26 [日]

第6回 読響アンサンブル・シリーズ
よみうり大手町ホール／14時30分開演(14時から解説)
The 6th Yomikyo Ensemble Series
Sunday, 26th July, 14:30 (Pre-concert talks from 14:00) / Yomiuri Otemachi Hall

※出演者と曲目のみ掲載しています。曲目解説は当日別紙を配布予定です。

《上岡敏之×読響の室内楽》

ピアノ／上岡敏之 Piano TOSHIYUKI KAMIOKA

ヴァイオリン／山田友子、赤池瑞枝 Violins YUKO YAMADA, MIZUE AKAIKE

ヴィオラ／長岡 晶子 Viola AKIKO NAGAOKA

チェロ／松葉春樹 Cello HARUKI MATSUBA

ナビゲーター／鈴木美潮 (読売新聞東京本社メディア局編集委員)

Navigator MISHIO SUZUKI

モーツァルト **ピアノ四重奏曲 第1番** ト短調 K.478 [約26分]
MOZART / Piano Quartet No. 1 in G minor, K. 478

- I. Allegro
- II. Adagio
- III. Rondo. Allegro moderato

[休憩 Intermission]

ブラームス **ピアノ五重奏曲 へ短調 作品34** [約35分]

BRAHMS / Piano Quintet in F minor, op. 34

- I. Allegro non troppo
- II. Andante, un poco adagio
- III. Scherzo. Allegro
- IV. Finale. Poco sostenuto – Allegro non troppo

[主催] 読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団

7.29 [水]

第584回 サントリーホール名曲シリーズ
サントリーホール／19時開演
The 584th Suntory Hall Popular Series
Wednesday, 29th July, 19:00 / Suntory Hall

指揮／ジェレミー・ローレル Conductor JÉRÉMIE RHORER **P.8**

ヴァイオリン／ヴェロニカ・エーベルレ Violin VERONIKA EBERLE **P.11**

コンサートマスター／ダニエル・ゲーデ Concertmaster DANIEL GAEDE

メンデルスゾーン **付随音楽〈真夏の夜の夢〉序曲** [約12分] **P.19**
MENDELSSOHN / “A Midsummer Night’s Dream” Overture

メンデルスゾーン **ヴァイオリン協奏曲** ホ短調 作品64 [約26分] **P.20**
MENDELSSOHN / Violin Concerto in E minor, op. 64
I. Allegro molto appassionato – II. Andante –
III. Allegro non troppo – Allegro molto vivace

[休憩 Intermission]

メンデルスゾーン **交響曲 第4番** イ長調 作品90 〈イタリア〉 [約27分] **P.21**
MENDELSSOHN / Symphony No. 4 in A major, op. 90 “Italian”

- I. Allegro vivace
- II. Andante con moto
- III. Con moto moderato
- IV. Saltarello. Presto

[主催] 読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団
[助成] 文化庁文化芸術振興費補助金（トップレベルの舞台芸術創造事業）

フランソワ＝ グザヴィエ・ ロト

François-Xavier Roth

知性と叙情があふれる
洗練を極めた音楽表現
6月に続いて登場

1971年フランス、パリ生まれ。
2003年には、17世紀から現代ま
での作品を、それぞれが書かれた
時代の楽器で演奏する革新的なオー
ケストラ「レ・シエクル」を自ら創
設。現在に至るまでフランス国内を
はじめイタリア、ドイツ、イギリス、

日本でも数多く演奏し続けている。13年
には同楽団とストラヴィンスキーのバレエ音
楽〈春の祭典〉を、同作品の初演100周年
を記念して録音し、そのCDは日本でも「レ
コード・アカデミー賞」大賞（管弦楽曲部門）
を受賞するなど、世界的に注目された。

11年には読響常任指揮者シルヴァン・カ
ンブルランの後任としてバーデンバーデン
&フライブルクSWR（南西ドイツ放送）響
の首席指揮者に就任。現代作品の演奏を
はじめ、R.シュトラウスの管弦楽作品の演
奏とレコーディングなど、意欲的な取り組
みが話題を集めている。オペラの分野で
はパリのオペラ・コミック座でのトマ〈ミニ



©Marco Borggreve

ョン〉、オッフェンバック〈山賊たち〉、ドリ
ーヴ〈ラクメ〉、ベルリン国立歌劇場でのモ
ートン・フェルドマン〈Neither〉、レ・シエ
クルとのワーグナー〈さまよえるオランダ人〉
が特に高く評価された。本年9月にケルン
市の音楽総監督（ケルン歌劇場の音楽総
監督）兼ケルン・ギュルツェニヒ管の首席指
揮者に就任することが発表されており、11
月にはベルリン・フィルにデビューするなど、
今後ますますの活躍が期待されている。

読響には先月のメトロポリタン・シリー
ズでのベルリオーズ〈幻想交響曲〉に続
いての出演となる。

◇7月1日 定期演奏会

デニス・ ラッセル・ デイヴィス

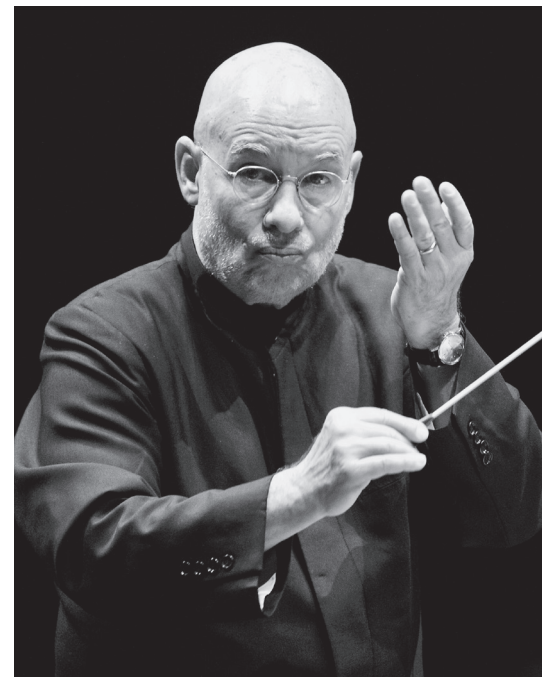
Dennis Russell Davies

古典派から現代曲まで
幅広いレパートリー
独創の名匠、再び登場

1944年米国オハイオ州生まれ。
ジュリアード音楽院で指揮とピア
ノを学ぶ。セントポール室内管
音楽監督を振り出しに、80年代
に独シュトゥットガルト歌劇場音
楽総監督、90年代から2000年
代にかけてシュトゥットガルト室

内管、ウィーン放送響の首席指揮者を
歴任。現在はオーストリアのリンツ・ブ
ルックナー管音楽監督やスイス・バーゼ
ル響首席指揮者を務める。

2013年末のベートーヴェン〈第九〉公
演で読響に初登場し、充実した演奏を
聴かせたのは記憶に新しい。ハイドン
などの古典派からブルックナー、ストラ
ヴィンスキー、さらにフィリップ・グラス
といった現代音楽まで縦横無尽の活躍
ぶりは有名だ。オペラハウスでのキャリ
アも長く、バイロイト音楽祭でのハリー
・クプファー演出のワーグナー〈さまよえる
オランダ人〉、シュトゥットガルト歌劇場で



©読響

のヘンツェ〈鹿の王〉が話題を呼んだ。近
年ではリンツ州立歌劇場でグラスの新作
〈ザ・ロスト〉の世界初演を成功に導いた。

録音はハイドン、ブルックナー、グラ
スの交響曲全集のほか、ホルストの〈惑
星〉やストラヴィンスキーの管弦楽作品
集、多数の現代オペラなどを手掛けて
いる。変わったところでは、ピアニスト
としてモーツァルト〈魔笛〉、ベートー
ヴェン〈フィデリオ〉の4手ピアノ編曲版を
弾いたCDが出ている。

読響には2013年12月以来の出演。

◇7月24日 東京オペラシティ名曲シリーズ

◇7月25日 みなとみらいホリデー名曲シリーズ

ジェレミー・ローレル

Jérémie Rhorer

古楽オーケストラ率いる
鮮烈な手腕で頭角表す
フランスの新鋭、初来日

1973年パリ生まれ。パリ国立
高等音楽院でチェンバロ、音楽
理論、作曲を学び、マルク・ミン
コフスキとウィリアム・クリスティ
に師事した。2005年、ヴァイオ
リニストのジュリアン・ショヴァン
と古楽オーケストラ「ル・セルク
ル・ドゥ・ラルモニー」を設立。パリのシ
ャンゼリゼ劇場やロンドンのバービカン・
センターなどでモーツァルトやベートー
ヴェンの交響曲を指揮し、鮮烈な解釈
で話題を呼んだ。

古楽演奏の知識・経験に裏付けられ
た斬新なアプローチを武器に、フランク
フルト放送響、フィルハーモニア管、ア
ンサンブル・モデルンなどのモダンオー
ケストラに客演したほか、ザルツブルク
音楽祭やグラインドボーン音楽祭にも出
演。オペラではウィーン国立歌劇場、フ
ランクフルト歌劇場、ベルギー王立劇場
などに招かれた。今年2月にバイエルン



©Yannick Coupannec

州立歌劇場でモーツァルト〈コジ・ファ
ン・トゥッテ〉を指揮し、来日直前の7月
には仏エクサン・プロヴァンス音楽祭で
モーツァルト〈後宮からの誘拐〉を振る
予定。

録音では、ソプラノのディアナ・ダムラ
ウとのモーツァルト、サリエリ、カウンタ
ーテナーのフィリップ・ジャルスキーとの
J. C. バッハの共演が話題になったほか、
モーツァルトの交響曲集やベートーヴェ
ンの初期作品集、チマローザの〈レクイ
エム〉などでも高い評価を得ている。

読響とは今回が初共演。

◇7月29日 サントリーホール名曲シリーズ

A rtist of the month

今月のアーティスト



ヴァイオリン 郷古 廉

Violin Sunao Goko

日本のヴァイオリン界期待の新星。1993
年宮城県生まれ。2006年、ユーディ・
メニューイン国際ヴァイオリンコンクール
のジュニア部門で史上最年少の1位とな
り、一躍注目を浴びた。07年にソリス
トとしてデビューし、今までに読響のほ
か新日本フィル、東京フィル、仙台フィル
などに招かれた。指揮者ではゲルハルト・
ボッセ、秋山和慶、井上道義、上岡敏
之らと共演。バッハの無伴奏ヴァイオリ
ン・ソナタなどを収めた録音もある。13
年ティボール・ヴァルガシオン国際ヴァイ
オリン・コンクール優勝ならびに聴衆賞・
現代曲賞受賞。現在、ウィーン留学中。

◇7月1日 定期演奏会



©読響

ヴァイオリン ダニエル・ゲーデ

Violin Daniel Gaede (YNSO Concertmaster)

2013年に読響のコンサートマスターに
就任したベテランが、ソリストとして登場
する。1966年独ハンブルク生まれ。カー
ル・フレッシュ国際コンクールをはじめ著
名コンクールでの受賞多数。94年から
2000年までウィーン・フィルおよびウィ
ーン国立歌劇場管のコンサートマスター
を務め、クラウディオ・アバド、リッカル
ド・ムーティ、ロリン・マゼールら世界的
巨匠と共演した。現在はコンサートマス
ター、ソリストのほか、室内楽奏者とし
ても活躍し、独ニュルンベルク音楽大学
教授として後進の指導にあたっている。

◇7月24日 東京オペラシティ名曲シリーズ

◇7月25日 みなとみらいホリデー名曲シリーズ



©wildundleise.de

チェロ グスタフ・リヴィニウス

Cello Gustav Rivinius

1965年独ザールラント生まれ。90年、チャイコフスキー国際コンクールのチェロ部門で1位。ドイツを代表するチェロ奏者の1人として、バイエルン放送響、ライプツィヒ・ゲヴァントハウス管、北ドイツ放送響のほか、チェコ・フィル、トゥールーズ・キャピトル国立管、チューリヒ・トーンハレ管、スウェーデン放送響、ピッツバーク響などに招かれている。指揮者ではマゼール、ゲルギエフ、ノイマン、ヤノフスキ、エッシェンバッハ、ジンマンらと共演。現在はザールブリュッケン音楽大学教授も務める。読響とは今回が初共演。

◇7月24日 東京オペラシティ名曲シリーズ
◇7月25日 みなとみらいホリデー名曲シリーズ

児童合唱 東京少年少女合唱隊

Children's Chorus Little Singers of Tokyo

合唱指揮 長谷川久恵

Chorusmaster Hisae Hasegawa

1951年、ヨーロッパの伝統音楽に基づく合唱曲に取り組む日本初の本格的合唱団として長谷川新一らによって設立された。65年に読響とブリテンの〈戦争レクイエム〉、67年にN響とモンテヴェルディの〈聖母マリアの夕べの祈り〉を日本初演するなど、グレゴリオ聖歌から現代音楽まで幅広いレパートリーを持つ。日本を代表する児童・少年合唱団として、アバド指揮のベルリン・フィル、テミルカーノフ指揮のサンクトペテルブルク・フィルの来日公演で共演したほか、オペラではウィーン国立歌劇場やミラノ・スカラ座、ボリショイ歌劇場など世界的歌劇場の来日公演に参加。

国内での年2回の定期公演のほか、アメリカ、ヨーロッパ、アジアなどでの海外公演は通算30回以上におよぶ。作曲家への委嘱にも積極的で、近年では松平頼暁、一柳慧、細川俊夫らへの委嘱作を初演している。来年創立65周年に先駆け、今秋にマカオ公演と年末年始にはイタリア公演を実施予定。

◇7月24日 東京オペラシティ名曲シリーズ
◇7月25日 みなとみらいホリデー名曲シリーズ



©Bernd Noelle

ヴァイオリン ヴェロニカ・エーベルレ

Violin Veronika Eberle

ドイツ期待の若手。1988年独ドナウウェルト生まれ。ポツベン、チュマチェンコに師事し、2006年、ザルツブルク復活音楽祭でラトル指揮のベルリン・フィルとベートーヴェンのヴァイオリン協奏曲を共演してデビューを飾った。今までにロイヤル・コンセルトヘボウ管、ニューヨーク・フィル、モントリオール響、ロサンゼルス・フィルのほか、指揮者ではマリナー、ノリントン、ナガノ、パーヴォ・ヤルヴィらと共演。ピアノの内田光子、ヴァイオリンのルノー・カプソンらとも室内楽で共演している。

読響とは今回が初共演。

◇7月29日 サントリーホール名曲シリーズ

7.1 [水]

飯尾洋一 (いいお よういち)・音楽ライター

ブーレーズ
〈ノタシオン〉から第1、7、4、3、2番

作曲：1945年（原曲）、1978年（第1番～第4番）、1997年（第7番）／
初演：1980年6月18日、パリ（第1番～第4番）、1999年1月14日、シカゴ（第7番）／演奏時間：約17分

精緻で色彩豊かな小曲集

フランスを代表する作曲家ピエール・ブーレーズ（1925～）の管弦楽作品のなかでも、現在もっとも頻繁に演奏されるのがこの〈ノタシオン〉だろう。

作品の成立は1945年まで遡る。メシアンのもとで学んでいた20歳のブーレーズは、ピアノのための〈12のノタシオン〉を作曲した。それぞれわずか1分前後の楽曲からなる小曲集で、各曲には簡潔ながら多様なニュアンスが込められている。

それから31年を経た1976年の夏、ブーレーズはバイロイト音楽祭でワグナーの〈ニーベルングの指環〉を指揮しながら、この小品集にオーケストレー

ションを施すことを思いつく。まずは、第1番から第4番までが78年に書かれ、84年に改訂された。管弦楽化に伴って、楽曲は大きく展開され、精緻で色彩豊かな作品に生まれ変わった。その後、さらに第7番が追加して管弦楽化されている。計5曲となった〈ノタシオン〉管弦楽版は、第1、7、4、3、2番、あるいは第1、3、4、7、2番の順で演奏されることが作曲者により推奨されている。

第1番 穏やかに、幻想的に

第7番 典礼風に、ゆっくりと

第4番 リズミクに

第3番 とても穏やかに

第2番 とても生き生きと、けたたましく

楽器編成／フルート4（ピッコロ持替）、アルトフルート、オーボエ3、イングリッシュ・ホルン2、クラリネット3、エスクラリネット、バスクラリネット、ファゴット4（コントラファゴット持替）、コントラファゴット、ホルン6、トランペット4、トロンボーン4、チューバ、ティンパニ、打楽器（シロフォン、ヴィブラフォン、チャイム、グラスチャイム、グロッケンシュピール、マリンバ、ベルツリー、カウベル、アンビル、ベルプレート、木魚、木鉦、トライアングル、クラベス、タンブリン、マラカス、大太鼓、小太鼓、銅鑼、スチールドラム、ハンドドラム、スリットドラム、トムトム、オクタバン、ティンパレス、アンティーク・シンバル、サスペンデッド・シンバル、シズル・シンバル、チャイニーズ・シンバル、メタルブロック、ウッドブロック、ボンゴ、ゴンガ、タブラ、コンガ）、ハープ3、チェレスタ、ピアノ、弦五部

ベルク
ヴァイオリン協奏曲〈ある天使の思い出に〉

作曲：1935年／初演：1936年4月19日、バルセロナ／演奏時間：約22分

早世した少女と自身へのレクイエム

1935年1月、アルバン・ベルク（1885～1935）はアメリカのヴァイオリニスト、ルイス・クラスナーから協奏曲の作曲を依頼される。それから間もなくして、マーラーの未亡人アルマが建築家ヴァルター・グロピウスと再婚してもうけた娘マノンが、病により18歳の若さで世を去った。マノンをかわいがっていたベルクは、当時取り組んでいた〈ルル〉のオーケストレーションを中断して、マノンへの追悼曲として、ヴァイオリン協奏曲を作曲することにした。献辞には〈ある天使の思い出に〉と記された。

作曲の筆はベルクとしては異例なほど速く進み、8月にはスコアが完成された。しかし、その4か月後、ベルクはこの協奏曲の初演を聴くことなく、50歳の生涯を閉じている。作品はマノンへの、そして自身へのレクイエムとなってしまった。

曲はそれぞれ二つの部分からなる2楽章で構成される。師シェーンベルクの提唱した十二音技法が用いられてい

るものの、基本音列が短三和音と長三和音の交替と全音音階によって設計されており、作品全体にロマン的な情感や清澄なりリズムを漂わせている。

第1楽章 アンダンテ～アレグレット
クラリネット、ハープ、独奏ヴァイオリンによる浮遊感の漂うアンダンテの導入で開始される。後半のアレグレットはスケルツォ風。舞曲風の楽想や民謡由来の主題などを交替させながら、さまざまな表情を浮かびあがらせる。

第2楽章 アレグロ～アダージョ
荒々しく悲劇的なアレグロで開始され、息づまるような緊迫感に満たされる。付点リズムの執拗な反復が特徴的。激しく峻厳なクライマックスを築いた後、後半のアダージョへと移行する。バッハのカンタータ第60番〈おお永遠よ、恐ろしき言葉〉終曲で用いられたコラール「われは満ち足り」が引用され、魂の安息と浄化が示唆される。崇高な雰囲気の中で、消え入るように曲を閉じる。

楽器編成／フルート2（ピッコロ持替）、オーボエ2（イングリッシュ・ホルン持替）、クラリネット3、アルトサクソ、バスクラリネット、ファゴット2、コントラファゴット、ホルン4、トランペット2、トロンボーン2、チューバ、ティンパニ2、打楽器（大太鼓、シンバル、サスペンデッド・シンバル、小太鼓、トライアングル、銅鑼、ゴンガ）、ハープ、弦五部、独奏ヴァイオリン

ハイドン 十字架上のキリストの最後の7つの言葉 (管弦楽版)

作曲：1785～86年頃／初演：1786年、カディス（スペイン）／演奏時間：約67分

アダージョが連続する特異な自信作

ウィーン古典派の礎^{いしづえ}を築いたオーストリアの作曲家ヨーゼフ・ハイドン（1732～1809）は、1761年、アイゼンシュタットに居城をもつエステルハージ侯爵家より副楽長として迎えられた。1766年に前任者が逝去すると、これにともなって楽長に昇格し、以来長年にわたって侯爵家の音楽活動を統率した。熱心な音楽愛好家であったニコラウス・エステルハージの求めに応じて、ハイドンは交響曲や弦楽四重奏曲、室内楽曲、オペラなど、幅広いジャンルにわたって、おびただしい数の作品を書きあげている。

やがてハイドンの名声はヨーロッパ中へと広がり、各地で盛んに作品が演奏されるようになる。1780年代になると、侯爵家以外からも作曲の依頼が舞い込むようになった。〈十字架上のキリストの最後の7つの言葉〉もそのひとつ。スペインの港町であるカディスの有力な司祭ホセ・サルーズの求めに応じて書きあげられた。

カディスのサント・ロザリオ教区教会では、四旬節ごとにキリストの受難と、磔^{たづけい}刑に処されたキリストが十字架

上で語ったとされる7つの言葉を題材とした作品を演奏することが慣例となっており、そのために当時のすぐれた作曲家に新作が委嘱されていた。

司祭は聖金曜日の礼拝にあたって、キリストの最後の7つの言葉のそれぞれを唱えるごとに、間奏曲のようにハイドンの管弦楽曲が演奏されることを望んだ。しかし、この要望に対して、ハイドンは当初危惧を抱いていた。

「説教が終わるごとにオーケストラが演奏を再開するという上演方法に合わせて曲を作ることが求められた。しかし、聴衆を退屈させることなく、それぞれが10分ちょうどの7つのアダージョが連続する作品を作曲することは容易ではない。やがて、制限時間を守るのは無理だと悟った」

ハイドンは司祭と手紙をやり取りし、時間的な制約を緩めてもらうことで、作曲を引き受けることに決めた。とはいえ、ゆったりとしたテンポによる7つの曲が連なるという条件に変わりはない。それまでハイドンが4楽章制の交響曲で発揮してきたような、ソナタ形式を原動力とする構築感や、楽

章の性格分けによる鮮やかなコントラストといった方法で聴衆の注意を引きつけることはできない。おそらく、ハイドンはこのような制約を挑戦と受けとって、大いに意欲をもって作曲に取りかかったにちがいない。完成された作品に対して、「音楽をはじめて聴く者であっても、深い感銘を抱かずにはいられない」と、自信にあふれた言葉を残している。

作品は1787年にウィーンとボンでも演奏されている。同年ウィーンで出版された後、ロンドンとパリでも出版されていることから、ハイドンの挑戦が大きな成功を収めたことがうかがえる。ハイドンはこの作品をすぐに弦楽四重奏版に編曲し、これもたちまち好評を博して、ヨーロッパ各地で出版されることとなった。また、ほかに声楽を加えたオラトリオ版、作曲者が認めたピアノ版も存在する。

なお、1803年12月にハイドンが指揮者として最後に聴衆に姿を見せた際に演奏したのも、この〈十字架上のキリストの最後の7つの言葉〉であった。

曲は以下のように序奏と7つのソナタ、終結部の「地震」で構成される。

序奏 マエストロソ・エド・アダージョ 厳粛な導入部。

第1のソナタ ラルゴ 歩むような

低弦の刻みを伴って、晴朗で穏やかな主題が奏でられる。

第2のソナタ グラーヴェ・エ・カンタービレ 悲痛な面持ちで開始されるが、次第に清澄な叙情があふれだし、安らぎへと到達する。

第3のソナタ グラーヴェ 静かに扉を叩くような短い序奏に続いて、やさしく呼びかけるような主題があらわれる。曲は一段と柔和さを増す。

第4のソナタ ラルゴ 力強い総奏で開始される、切々とした嘆きの歌。

第5のソナタ アダージョ 弦楽器による細かなピッツィカートは水の滴りの表現か。鋭く決然とした強奏が続く。

第6のソナタ レント すべてが成し遂げられた後に、平安が訪れる。

第7のソナタ ラルゴ 温かく大らかな慈愛の音楽。

地震 プレスト・エ・コン・トゥッタ・ラ・フォルツァ 突如として、荒々しい最強奏が静寂を破る。

最後の「地震」では、イエスの死の直後に起きたと伝えられる地震が描写的に表現されている。「そのとき、神殿の垂れ幕が上から下までまっぴたつに裂け、地震が起こり、岩が裂け、墓が開き、眠りについていた多くの聖者たちの体が生き返った」（マタイによる福音書）

楽器編成／フルート2、オーボエ2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、ティンパニ、弦五部

7.24 [金]

7.25 [土]

オヤマダアツシ・音楽ライター

ブラームス ヴァイオリンとチェロのための二重協奏曲 イ短調 作品102

作曲：1887年／初演：1887年10月18日、ケルン（ドイツ）／演奏時間：約32分

盟友との和解への思い背景に

102という作品番号が付けられたこの曲は、ヨハネス・ブラームス（1833～97）がオーケストラを使った最後の作品になる。54歳となった1887年に完成した作品であり、すでに四つの交響曲や二つの演奏会用序曲、三つの協奏曲（ピアノ2曲＋ヴァイオリン）等を発表していたブラームスは、オーケストラの作曲家として円熟の域に達していたと言えるだろう。

それにしてもヴァイオリン＋チェロという、あまり多くは書かれなかった組み合わせの協奏曲はなぜ生まれたのだろうか。1885年に交響曲第4番を完成・初演したブラームスは、次の交響曲についても構想を練っていた。一方では、ロベルト・ハウスマンというチェリストのためにチェロ協奏曲を書こうとしていた可能性もあるという。しかしもっと

も重要なポイントは、10代の頃より敬愛し、音楽的理解を深めてきたヨーゼフ・ヨアヒム（ヴァイオリニスト）の存在だ。

共に「新音楽派（リスト＝ワーグナーの一派）」へ反旗を翻^{ひるがえ}したこともある盟友だったブラームスとヨアヒム。しかしヨアヒム夫妻の離婚トラブルに巻き込まれ、妻の肩を持ってしまったブラームスに対してヨアヒムは嫌悪感を抱く。そのもつれた感情を解きほぐしなかったブラームスは、再び交友を深めようとして二重協奏曲の作曲を思い立ったのである。ゆえにブラームスの“心の友”であるクララ・シューマンは、この作品を「和解の協奏曲」と称した。

第1楽章 アレグロ、イ短調、ソナタ形式。**第2楽章** アンダンテ、ニ長調、三部形式。**第3楽章** ヴィヴァーチェ・ノン・トロッポ、イ短調、ロンド形式。

楽器編成／フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、ティンパニ、弦五部、独奏ヴァイオリン、独奏チェロ

ホルスト 組曲〈惑星〉 作品32

作曲：1914～17年／初演：1920年11月15日、ロンドン（イギリス）／演奏時間：約51分

星占いや神話をヒントにした宇宙の調べ

ドイツやオーストリア、フランスなど多くの作曲家と名作を送り出していた18世紀から19世紀にかけて、イギリスは文化国でありながらも音楽の多くを“輸入”に依存。自国から国際的に誇れる作曲家を輩出するのは19世紀末のことであり、しかもその数は極めて少なかった。だからといって、その時期に現れた作曲家たちのクオリティが、世界的な基準に追いつかなかったわけではない。その証明となる一人がグスターヴ・ホルスト（1874～1934）であり、4管編成という大オーケストラによる組曲〈惑星〉は、その代表作だと言える。

幼い頃から音楽教育を受け、ロンドンにある王立音楽大学（ロイヤル・カレッジ・オブ・ミュージック）で作曲を学んだホルストだったが、結果的には「日曜作曲家」として生涯を送った。音楽院卒業後はトロンボーン奏者としてオーケストラや吹奏楽団などで演奏し、その後は音楽教師としていくつかの学校へ赴任。中でも30歳（1905年）の時に赴任した「セント・ポール女子学校」では音楽を教えるほか、学生た

ちで弦楽オーケストラを組織するなど意欲的に活動。彼女たちのために有名な〈セント・ポール組曲〉や、学校のあった地区の名前を冠した〈ブルック・グリーン組曲〉などを作曲している。ゆえに純粋な作曲の時間は学校の休日であり、娘のイモージェン・ホルスト（音楽学者、作曲家）は「休みの日に父親と学校の音楽室へ行くのは、まるでピクニックみたいだった」と述懐していた。

その一方で、インドをはじめとする東洋の思想・文学にも興味を持ち、さらには占星学や神智学などにも精通していた。組曲〈惑星〉は太陽系の天体をモチーフにした宇宙の音楽だと思われる方もいらっしゃるだろうが、実際には占星学、つまり星占いとそれに関連する思想や神話がヒントになっている。

しかし、ホルスト自身は「音楽が描くものは天体でも神々でもなく、標題音楽にあらず」と語っていたようなので、各曲について記した後述のコメントも曲へ近づぐためのヒントだと思っていただければ幸いである。

7.29 [水]

片桐卓也 (かたぎり たくや)・音楽ライター

メンデルスゾーン
付随音楽〈真夏の夜の夢〉序曲

作曲：1826年／初演：1827年2月20日、シュテティン（現ポーランド、当時プロイセン）／演奏時間：約12分

完成度の高さが示す神童ぶり

ドイツの作曲家フェリックス・メンデルスゾーン（1809～47）は、幼少期から音楽的才能を発揮し「神童」と呼ばれることもあった。その才能を証明するものとしてよく例にあげられるのが、この〈真夏の夜の夢〉序曲である。作曲されたのは1826年、つまりメンデルスゾーンが17歳の時である。それ以前にも交響曲などさまざまな作品を発表していたメンデルスゾーンだが、この作品は特に完成度が高く、10代の作品とは思えないと絶賛された。

〈真夏の夜の夢〉はイギリスの劇作家シェイクスピアによる有名な戯曲だが、メンデルスゾーンは姉ファニー（彼女も優れた作曲家であった）と連弾をするためにピアノ用の曲としてこの序曲を書き上げ、それをすぐにオーケストラ用に編曲した。木管楽器によ

る幻想的な序奏に続き、妖精たちが夏の夜の森の中を飛び回っているような細かな動きが登場する。そしてオーケストラの堂々とした合奏が続く。管楽器の動きも面白い。初演の時の指揮はカール・レーヴェが担当した。メンデルスゾーンが何度も訪問したイギリスでは、1829年にメンデルスゾーン自身の指揮で初演されている。

後にこの曲を聴いて感銘を受けたプロイセン王フリードリヒ・ヴィルヘルム4世は、メンデルスゾーンに〈真夏の夜の夢〉の戯曲全体に音楽を付けるように命じた。1843年にメンデルスゾーンは全12曲から構成される付随音楽〈真夏の夜の夢〉を完成するが、その中には有名な〈結婚行進曲〉などが含まれている。そして、この序曲はそのまま全体の序曲として再利用された。

音楽的には、20世紀に入ってから発表されたさまざまな新しい音楽、つまりドビュッシーの諸作品やラヴェルの諸作品（特にバレエ音楽〈ダフニスとクロエ〉）、〈春の祭典〉を筆頭とするストラヴィンスキーの衝撃的な新作バレエ音楽、そのストラヴィンスキーの師であったリムスキー＝コルサコフの音楽、シェーンベルクの〈5つの管弦楽曲〉といった作品などに、大きな影響を受けたと伝えられる。やはり大編成のオーケストラを要するマーラーの交響曲についても、「影響は受けなかった」と断言するのは勇気がいるだろう。

第1曲 火星：戦争の神 弦楽器がコル・レーニョ（弓で弦を叩く奏法）で不安げにリズムを刻み、軍神マルス（マース）の荒々しい進撃を思わせる音楽が展開されていく。5拍子という不安定な行進、中間部の不安げで恐怖心を煽るような音楽も印象的。

第2曲 金星：平和の神 一転して幸福に包まれる音楽。ホルンに導かれる冒頭のメロディ、ヴァイオリン・ソロによる夢見るような音楽などが、美の女神であるヴェヌス（ヴィーナス）を讃えるように奏でられる。

第3曲 水星：翼のある使いの神 妖精が飛び回するようなスケルツォ。旅行

者の守護神であるメルクリウス（マーキュリー）の化身。

第4曲 木星：快樂の神 主神ユピテル（ジュピター）を讃えるように勇壮な音楽が奏でられ、生命のエネルギーが音楽から放射されていく。中間部で演奏される民謡風のメロディは、今やヒット・ソングに。

第5曲 土星：老年の神 農耕の神であり、時を司る者でもあるサトゥルヌス（サターン）の名が付けられた惑星。闇の中から悠然とした行進が聞こえてくる。

第6曲 天王星：魔術の神 巨大な天空神ウラヌス（ユーラナス）の偉大さを讃えるような力強いスケルツォ。冒頭に金管楽器などが演奏する四つの音（音列）が主題となり、ポール・デュカスの有名な交響詩〈魔法使いの弟子〉と共通点が多い。

第7曲 海王星：神秘の神 海の神ネプトゥーヌス（ネプチューン）の名が付けられた水の惑星の神秘。オーケストラにはごく一部を除いて弱音（ピアニッシモ）が指定され、途中からはヴォカリーズによる合唱も加わる（スコアの指定では女声合唱だが、本日は特別に児童合唱のピュアな声で歌われる）。

楽器編成／フルート4（ピッコロ持替、アルトフルート持替）、オーボエ3（バスオーボエ持替）、イングリッシュ・ホルン、クラリネット3、バスクラリネット、ファゴット3、コントラファゴット、ホルン6、トランペット4、トロンボーン3、チューバ、テナーチューバ、ティンパニ2、打楽器（グロッケンシュピール、シロフォン、銅鑼、鐘、小太鼓、タン布林、大太鼓、トライアングル、シンバル）、ハープ2、チェレスタ、オルガン、弦五部、児童合唱

楽器編成／フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、チューバ、ティンパニ、弦五部

メンデルスゾーン ヴァイオリン協奏曲 ホ短調 作品64

作曲：1844年／初演：1845年3月13日、ライプツィヒ／演奏時間：約26分

ロマン派を代表する流麗な旋律

ロマン派を代表するヴァイオリン協奏曲と言えば、このメンデルスゾーンの小傑作が最初に挙げられるだろう。その他ではブラームス、チャイコフスキーが有名だ。また、ドイツの作曲家の書いたヴァイオリン協奏曲として、ベートーヴェン、メンデルスゾーン、ブラームスの3人の協奏曲が三大ヴァイオリン協奏曲として挙げられることもある。

メンデルスゾーンは1835年からドイツ中部の街ライプツィヒのオーケストラ、ライプツィヒ・ゲヴァントハウス管弦楽団の指揮者に任命されていて、同地でさまざまな音楽活動をリードしていた。その時期の最も大きな遺産はライプツィヒ音楽院の創設だろう。現在も音楽演劇大学として存続している。さて、1838年にメンデルスゾーンはゲヴァントハウス管弦楽団のコンサートマスターであるフェルディナント・ダーヴィト（1810～73）に手紙を送り、その中でホ短調のヴァイオリン協奏曲を翌年（つまり1839年）の冬までに書きあげて贈ると書いた。し

かし、作曲はなかなか進まず、ダーヴィトの助言も得ながら、1844年9月ようやく完成した。

この協奏曲は三楽章で構成されているが、その三つの楽章をすべて繋げて演奏するという形式になっている。それは音楽的な流れを演奏の途中で断ち切らないように、というメンデルスゾーンの配慮だった。

第1楽章は冒頭から独奏ヴァイオリンが流麗な音楽を奏でて、全体をリードしていく。そして、展開部の終わりに独奏ヴァイオリンのためのカデンツァが置かれ、その後に再現部に入るという工夫がなされている。ファゴットの吹く音がそのまま**第2楽章**への導入となる。ここはアンダンテの緩徐楽章で、ロマン派らしい優しい主題を独奏ヴァイオリンが弾く。中間部は重々しい。そして独奏ヴァイオリンが**第3楽章**の序奏を弾き始める。第3楽章の主題はアレグロ・モルト・ヴィヴァーチェ。〈真夏の夜の夢〉序曲にも通じるような軽快で跳ね回るような音楽だ。

楽器編成／フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、ティンパニ、弦五部、独奏ヴァイオリン

メンデルスゾーン 交響曲 第4番 イ長調 作品90 〈イタリア〉

作曲：1832～33年／初演：1833年5月13日、ロンドン／演奏時間：約27分

ローマへの旅をモチーフにした名作

メンデルスゾーンが最初の交響曲第1番を書いたのは1824年、15歳の時だった。それ以前にも弦楽器のための交響曲を12曲書いており、メンデルスゾーンはこの最初の交響曲を第13番としていた。その後には、現在〈宗教改革〉のサブタイトルで知られる第5番が1830年に、次いで3番目に交響曲第4番〈イタリア〉として知られるこの曲が書かれた。さらに第2番〈賛歌〉が1840年に、第3番〈スコットランド〉が42年に書かれた。作品の書かれた順番と交響曲の番号は、出版の順番などの理由で全然違う順序になっているわけである。

交響曲第4番〈イタリア〉は、メンデルスゾーンの交響曲の中でも演奏頻度の高い作品である。サブタイトルのように、メンデルスゾーンが1830～31年にかけて旅行したイタリアの印象をもとに作曲した交響曲だ。その旅行中に音楽のアイデアを得て、作品に取りかかっていたが、正式には1832年11月にロンドンのフィルハーモニック協

会からの依頼に応える形で作曲が進められ、33年1月に完成した。この時には演奏会用序曲〈フィンガルの洞窟〉も併せてフィルハーモニック協会に提出された。

〈イタリア〉の**第1楽章**はとても晴れやかな音楽から始まる。木管楽器の短い序奏の後で、ヴァイオリンが高らかに第1主題を歌いあげる。この第1主題をかなり発展させた後に、ファゴットとクラリネットによる穏やかな第2主題が登場する。展開部はフーガによって始まり、次第に高まっていく。そして再現部に入る。

第2楽章は少し古い時代を想起させるような音楽が弦楽器、木管楽器によって演奏される。3部形式。**第3楽章**はメヌエットのようなおだやかな舞曲風の音楽。中間部でのホルンのメロディが印象的だ。そして**第4楽章**はローマの民衆的な音楽サルタレッロをモチーフにした楽章で、熱狂的な踊りの雰囲気の中で一気に進んでいく。

楽器編成／フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、ティンパニ、弦五部